

ライフライン曲線の適用による震災復興感調査

Earthquake reconstruction survey by application of lifeline curves

水田 恵三¹

Keizo MIZUTA

¹尚綱学院大学総合人間科学部

Faculty of Comprehensive Human Science, Shokei Gakuin University

In this study after the Great East Japan Earthquake, we applied the lifeline to the recovery curve for nine people, and visited the feeling of reconstruction after the disaster. As a result, I feel that most people are not reconstructed (they have not returned to the point of time below). However, although it is a rare case, there have been cases where marital relationship has improved better than before through various trials.

Keywords : The Great East Japan Earthquake, lifeline curves

1. 目的

東日本大震災後6年半が経過した。しかし、被災地では仮設住宅には30000人以上の人々が生活している。その方々の現状を伝えるのは、現地にいる人々の務めであるが、6年間を聞くとなると、時間的に冗長となる可能性が高い。また、6年間を自己を客観的に位置づけ語ることも困難を伴う。そこで、考えられるのが、臨床心理学の分野で使用されている「ライフライン」である。これは今までの人生を左側から右側に向かって書いてもらう。上がプラスで下がマイナスで、主に感情の起伏について書いてもらうものである。(図1 模式図)

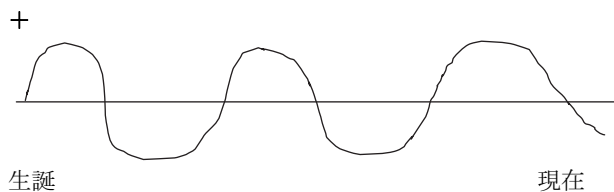


図1 ライフライン

左を生誕とし、右端を現在、年齢や幅は自分で任意に記入する。このような方法を用いることによって現在までの自分を客観視できるとともに、面接の一助ともなると考えられる。ライフラインを集団で行う方法もあるが、曲線は主観的なものであるので面接と併用し、事実を確認することが必須と考える。

2. 方法

東日本大震災後、ご本人の許可を得て実施可能であった石巻市及び福島県の被災者9名のデータを分析する。

3. 結果

そのうちの1名はデータ収集後2年間の後再度データ収集が可能であった。

震災を左端とし、右端を現在とした。主に感情を中心とした変化を自由に記述してもらった。なお、今回のデータはローデータではなく模写図である。

ケース1

石巻市のケース

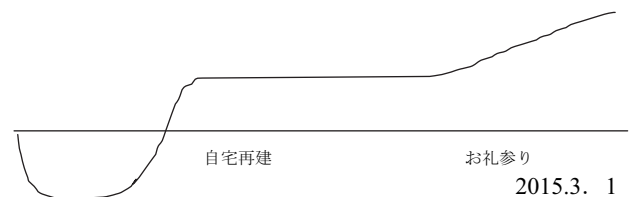


図2 ケース1の復興曲線

震災時物資が全くなかった。避難所でもなかった。地元の人以外はよそのだからだめ(物資はあげない、よそへいけ)と言われた。仮設住宅は7回抽選で外れ、穴居自宅を修繕して住むことにした。秋田の農家の方がくださったばた餅や卵かけご飯がおいしかったことが思い出に。その後、アメリカの人々や日本の人など支援してくださった方にお礼をする意味で、その地を訪れたことで安定していった。

(補足)

70代男性 結局家は再建した。家を建てたのは3度目という。若い頃から船で海外に行くことが多く、船舶年金をもらっている。石巻の自力再建の被災者の月一回の会合に参加。お礼参りを行うことにより復興感が増す。

ケース 2
石巻市のケース

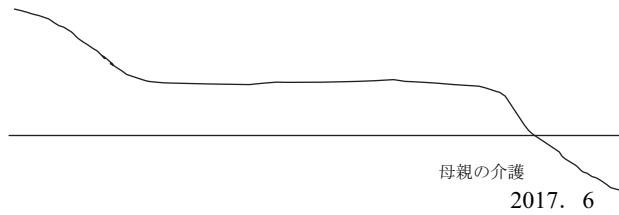


図 3 ケース 2 の復興曲線

石巻市で被災。震災直後は避難所運営でリーダーとなりその後も講演や支援活動などで活躍、忙しい日々を送る。その後最近になって母親の介護を行うことになり、次第に落ち込んでいく。

(補足)

60代男性 NPOで震災直後から避難所運営で活躍。現在でも子どもを中心とした復興支援を行っている。

ケース 3、4

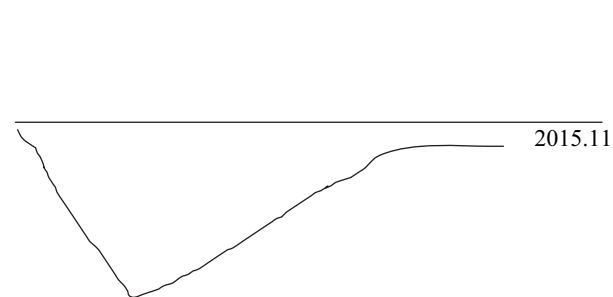


図 4 ケース 3 の復興曲線

震災直後から落ち込み急降下するが、支援している子どもたちと招待され、台湾、スペインへ行く。他者から認められ徐々に復興。

ケース 4

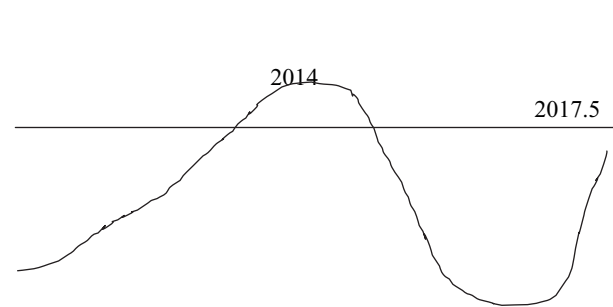


図 5 ケース 4 の復興曲線

ケース 3 と 4 は同一人物である。

2014年に他県のチームが支援に来てくれたことがプラスに。しかし、最近ではそのことはプラスには評価していない。他者から評価されることで、気分はプラスになるが、未だ復興には至っていない。

(補足)

60代女性。NPOで震災直後から活躍。しかし、その後どん底に。2013年、2014年に海外に招待された、2014年には国内の団体から継続的に支援を受けることによって元気が出てくる。国外からの招待ではプラスに至らな

かったが、国内の団体から継続的に援助を受けることでプラスに転ずる。しかし、住居が未だ定まらないこともあってか、またマイナスに転じ現在やっとプラスになりかけている。現在震災からの記録を作成中で、そのことが気持ちの整理を促している。

ケース 5
福島県二本松市のケース

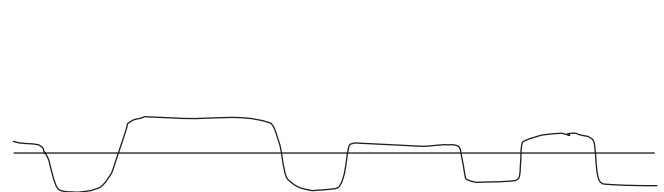


図 6 ケース 5 の復興曲線

女性。福島県の浪江から二本松市に避難。障がい者福祉作業所をもともと経営していた。2011年10月二本松市で再開した。浪江町から避難している障がい者と、現地の障がい者とを同時に雇用。金銭面でのトラブルがあり、閉所。その後、近くに場所を探し再度作業所を始めるが、近隣とのトラブルなど様々な問題が生じる。その後、南相馬市に自宅を再建し、事務所まで通う生活を続けている。何か問題が生じたときに気分が沈み、場所を変えたり、新たな事業を始めるときに気分が上昇すると、自己分析していた。

ケース 6

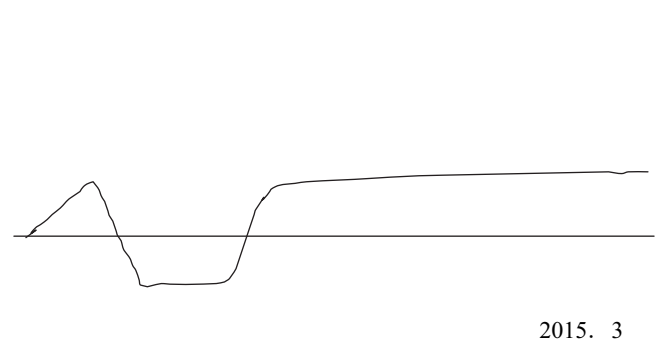


図 7 ケース 6 の復興曲線

二本松市から郡山市に避難した男性。

震災前は商業。震災後親族を頼り、郡山市にアパートを借りる。しかし、望郷の念立ちがたく、浪江の近くに戻ろうとするが、うまくいかず。二本松にNPOを立ち上げ、帰郷と復興を支援している。その活動で、一気にプラスへ。

ケース 7

H23 H24 H25 H26 H27



図 8 ケース 7 の復興曲線

ケース 6 の所属する NPO の理事長。

原発避難者は、周囲の状況によって心情が紆余曲折する。母親が仮設住宅で周囲からの支えで元気になる。この方の場合、NPO を設立してもさほど変化はみせなかったが、集団移転（浪江外）に動き出すとやや上昇傾向になる、ただし、集団移転に可否によっては、不安になる可能性もある。

ケース 8

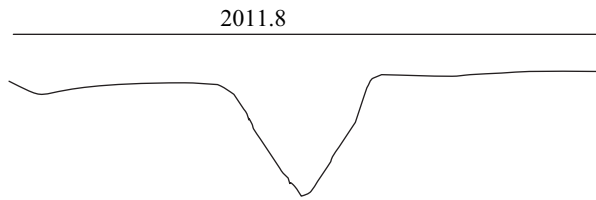


図 9 ケース 8 の復興曲線

浪江町から南相馬の仮設住宅に避難しているケースである。最初は避難所にいたが、避難所に夫婦で移る。知っている人もいないで、最初は孤独感を感じていたが、この仮設住宅で過ごすうちに、徐々に活動も増加して、気分が回復。最近（2015. 3）南相馬に自宅を再建するが、仮設に通っている。再建しても曲線は元には戻っていない。

ケース 9

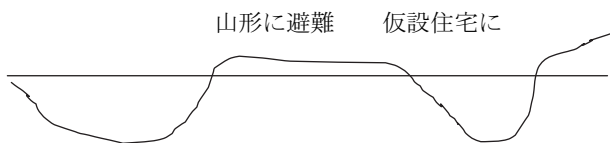


図 10 ケース 9 の復興曲線

このケースは、元々は漁師で浪江町から南相馬の仮設住宅に避難しているケースである。三世代で結局は山形県北部まで避難した。そこで町をあげての歓迎を受ける。工事現場の仕事も夫婦揃って得る。周囲の人たちは優しく受け入れてくれるが、立場の違いが辛くなり、また同郷の人たちへの思いから、帰郷を決意。息子さんたちは別の仕事を得て、県外へ。ここで三世代は夫婦二人のみの家族に移行する。かえった先は、浪江に近い小高地区。知り合いもいたが、仮設住宅が南相馬市にあることでその仮設に移住した。しかし、夫婦仲が急速に悪くなり、離婚を決意。しかし、仮設住宅の同郷の人たちや飯館村から避難している人たちと一緒に暮らす中で、アドバイスを受け、夫婦仲は回復した。いまは、染度の低い下の自宅に夫婦で戻ることを考えている。

ほとんどの方が復興はしていない（下の時点には戻っていない）と感じている。しかし、希なケースではあるが、様々な試練を経て、夫婦関係が以前よりもよくなったケースがある。

次に復興曲線を、ある出来事で気持ちが上昇した場合の事象と下降した事象（震災を除く）に分けてたのが下の表である。

表 1 ケースの分類

上昇した事象	下降した事象
自宅再建	母親の介護
自らお礼参り	人間関係トラブル
震災後の混乱で活動	地元の人との関係不調
周囲から認められる	故郷に戻りたい気持ち
周囲から支えられる	仮設住宅での辛さ
気持ちや事実を整理する	
仕事再開	
仕事場が見つかる	
避難先が見つかる	
NPO で自ら活動	
故郷の近くに居れそう	
母親が元気になる	
仮設住宅での活動	
自宅再建	

福島県の場合は故郷に戻りたいけれども、戻ることができないもどかしさが気分の上昇につながっている。その一方で、自宅を再建したり、故郷の近くに居れそうだということで気分が上昇する場合もあるが、それは安定したものではなく、状況に大きく左右されている。

4. 考察

ライフライン曲線を復興のプロセスとして利用して、事例を分析した。

この復興曲線を用いるメリットは、

- ・自身を客観的に振り返ることが出来る
- ・自身に影響を与えた事象を振り返ることが出来る
- ・現在の立ち位置を確認できる
- ・面接の一助として使用できる。しかも比較的短時間で

デメリットは

- ・自分の気持ちを一つの曲線で示すことは難しい。
- ・こちらの指示を理解してもらうことが難しいこともある（ご自身の振り返りが得意な人と得意ではない

人がいる)。

- ・主観的な曲線であるので数量的な分析は出来ない。
- ・面接と併用しないと不完全である。

今後も面接と併用しながら（こちらは質的分析が可能である）、コミュニケーションツールとして用いて、データを重ねていきたい。

参考文献

- 1) 安藤清志・松井豊編著：地域と職場で支える被災地支援，誠信書房，2016
- 2) 河村茂雄：心のライフライン，誠信書房，2000